

201518018A

厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策政策研究事業 H27-エイズ-若手-001

ゲイコミュニティにおけるコホートの構築と HIV および梅毒罹患率の推計に関する研究

平成 27 年度 総括研究報告書

研究代表者 塩野 徳史

平成 28 年 (2016) 年 3 月

報告書の修正について

本報告書を利用することが可能であるため、以下の通り修正しました。

文献番号：201518018A

課題番号：H27-エイズ-若手-001

補助金名：厚生労働科学研究費補助金

研究事業名：エイズ対策政策研究事業

年度・研究成果の区別：平成 27 年度 総括・分担研究報告書

研究課題名：ゲイコミュニティにおけるコホートの構築と HIV および梅毒罹患率の推計に関する研究

研究代表者名：塩野 徳史

【修正箇所】

奥付ページ

「本報告書に掲載された論文及び図表には著作権が発生しております。複写等の利用にあたっては発行者までご連絡ください。」の削除

【修正理由】

当初「本報告書に掲載された論文及び図表には著作権が発生しております。複写等の利用にあたっては発行者までご連絡ください。」と記載されていたが「厚生労働科学研究成果データベース閲覧システム コンテンツ利用規約」に則り、本報告書を利用することが可能であるために記載を削除した。

平成 30 年 10 月 1 日

研究代表者 塩野 徳史

厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策政策研究事業

H27-エイズ-若手-001

ゲイコミュニティにおけるコホートの構築と
HIV および梅毒罹患率の
推計に関する研究
－平成 27 年度 総括研究報告書－

研究代表者

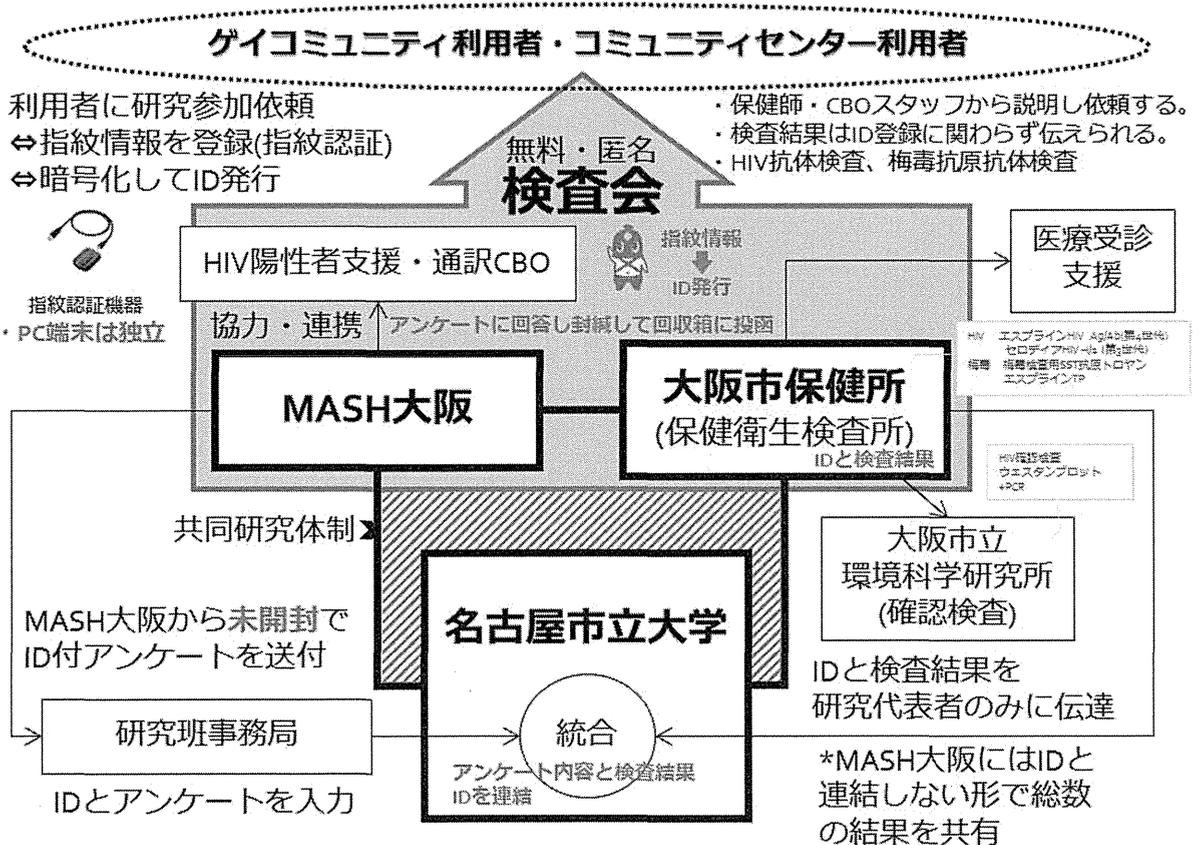
塩野徳史

名古屋市立大学

平成 28 (2016) 年 3 月

研究組織および連携体制

研究代表者	塩野徳史	名古屋市立大学看護学部
研究協力者	後藤大輔	公益財団法人エイズ予防財団/MASH 大阪
	町登志雄	公益財団法人エイズ予防財団/MASH 大阪
	宮田りりい	公益財団法人エイズ予防財団/MASH 大阪
	大畑泰次郎	MASH 大阪
	伴仲昭彦	MASH 大阪
	鬼塚哲郎	京都産業大学文化学部/MASH 大阪
	松本健二	大阪市保健所感染症対策監
	半羽宏之	大阪市健康局医務監兼保健所感染症対策課長
	安井典子	大阪市保健所感染症対策課
	細井舞子	大阪市保健所感染症対策課



目次

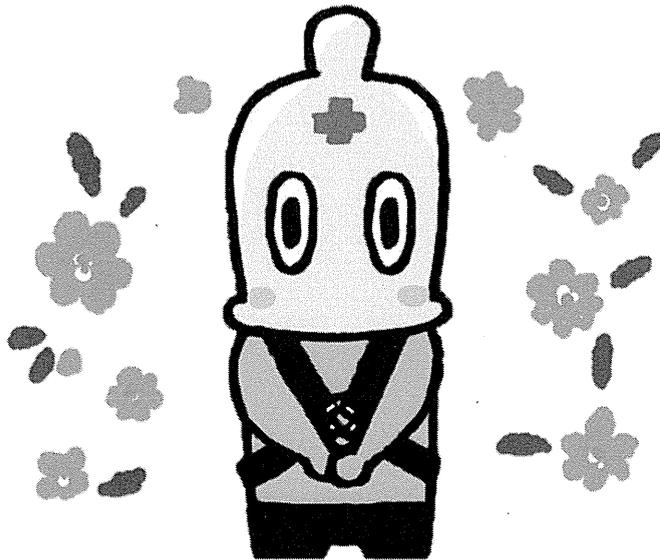
I.	総括研究報告	3
II.	研究報告	
	1. コミュニティセンター利用者調査の結果	12
	2. 『dista でピタッとちえっくん』 検査会の仕組み	44
	3. 検査会利用者の属性に関する調査結果	53
III.	研究成果の刊行に関する一覧表・刊行物	64
IV.	広報および実施に関わり作成した配布資料	

厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策政策研究事業

H27-エイズ-若手-001

ゲイコミュニティにおけるコホートの構築と
HIV および梅毒罹患率の
推計に関する研究

I 総括研究報告



ゲイコミュニティにおけるコホートの構築と HIV および梅毒罹患率の推計に関する研究

研究代表者：塩野徳史（名古屋市立大学看護学部/MASH 大阪）

研究協力者：後藤大輔、町登志雄、宮田りりい（公益財団法人エイズ予防財団/MASH 大阪）

大畑泰次郎、伴仲昭彦（MASH 大阪）

鬼塚哲郎（京都産業大学文化学部/MASH 大阪）

松本健二（大阪市保健所感染症対策監）

半羽宏之（大阪市健康局医務監兼保健所感染症対策課長）

安井典子、細井舞子（大阪市保健所感染症対策課）

研究要旨

本研究の目的は大阪のMSM(Men who have sex with men)を対象に、血液検査と連動させた前向きコホートの構築と人年法を活用してHIV感染症および梅毒の罹患率を推計し、予防啓発の評価尺度を確立することである。先行研究では日本のHIV感染動向はMSMに限局的に拡大しており、特にゲイ向け商業施設利用者は性行動が活発で、感染リスクの高い集団である。またMSMにおいて梅毒は感染が増加していることも報告されている。MSMにおけるHIV感染や梅毒感染の状況を把握することは、今後の感染対策の方針の決定や予防啓発の評価尺度として極めて有効である。MSM対象の血液検査と連動した前向きコホート形成は国内で初めてであり、将来的に今後新たに展開される予防介入試行の基盤となりうる。

調査デザインは血液検査結果と連動させた前向き追跡研究とした。研究参加者の個人特定には指紋認証の技術を応用したシステムによってIDを発行し、氏名や住所などの個人情報の取得は必要ない。研究参加者は量的質問紙調査法を活用したベースライン調査とフォローアップ調査および血液検査を継続的に参加する仕組みとした。本研究は名古屋市立大学看護学部倫理委員会の承認を得ており、検査体制の整備はゲイ・バイセクシュアル男性当事者を中心としたNGO組織・MASH大阪や大阪市や大阪府などの行政と協働し、本研究参加による差別や偏見を受けないように配慮する。

今年度は、コホート体制を構築し、コミュニティセンターで実施可能な検査会を大阪市と共同し4回実施した。対象集団の属性把握のためのベースライン調査は、本検査会の効果評価を目的に追加し、検査会の前後に連続横断的な無記名自記式質問紙調査を実施した。検査会は計127人が利用し、先行研究と比べHIV陽性判明割合は5.5%と極めて高く、計画に即した対象層をリクルートしたと考える。しかし第1期コホート登録者は92人であり目標の300人は達成できなかった。

コミュニティセンター利用者調査の回答者(n=160)における一元配置分散分析の結果、性感染症スティグマは、今後の受検意図や感染後のカミングアウトに対する態度と関連していた。性感染症スティグマは感染後のカミングアウトについて話す必要がある群で高く、3-6ヶ月間毎の定期

受検を意図する群でも高かった。この背景にある規範構造を検討していく必要があるが、今後予防介入を進める上では性感染症スティグマを増加させないような工夫が必要となる。本研究で得られた検査と性感染症に関する尺度は、コミュニティセンターでの検査会自体の評価や、検査プログラム開発を進める上で有用であり、今後さらに分析を進めていく。

	1回目	2回目	3回目	4回目	計	2014年度
	8月	9月	10月	1月		
受検者数	25人	27人	23人	52人	127人	60人
初利用者	25人	26人	22人	44人	117人	
指紋登録者数	24人 (96%)	22人 (84.6%)	18人 (81.8%)	28人 (63.6%)	92人 (78.6%)	-
結果受け取り	25人	24人	22人	51人	122人	59人
HIV陽性判明数	0人 (0.0%)	3人 (11.1%)	4人 (17.4%)	0人 (0.0%)	7人 (5.5%)	1人 (1.7%)
梅毒受検者	24人	26人	22人	52人	124人	
梅毒陽性判明数(要治療)	0人 (0.0%)	2人 (7.7%)	3人*重複 (13.6%)	0人 (0.0%)	5人 (4.0%)	2人 (3.3%)
梅毒陽性判明数(既往含む)	2人 (8.3%)	3人 (11.5%)	3人 (13.6%)	2人 (3.8%)	10人 (8.1%)	-

A. 研究目的

本研究の目的は大阪の MSM (Men who have sex with men) を対象に、血液検査と連動させた前向きコホートの構築と人年法を活用して HIV 感染症および梅毒の罹患率を推計し、予防啓発の評価尺度を確立することである。

先行研究によれば日本の HIV 感染動向は MSM に限局的に拡大しており、特にゲイ向け商業施設利用者は性行動が活発であり、感染リスクの高い集団である。また MSM において梅毒は感染が増加していることも報告されており、MSM 対象の検査会での梅毒有病率は HIV 感染よりも高い。MSM における HIV 感染や梅毒感染の状況を把握することは、今後の感染対策の方針の決定や予防啓発の評価尺度として極めて有効である。初年度は大阪のゲイ向け商業施設を中心としたゲイコミュニティにおいて、血液検査と連動させた前向きコホートを構築することを目的とした。

B. 研究方法

初年度は血液検査と連動させたゲイコミュニティコホートの体制構築を目的に、コホート方法の開発と血液検査を実施した。検査会の運営は大阪市保健所と、広報や支援団体との連携・研究推進では MASH 大阪と協働した。

1) コホートの構築

本研究では対象者の個人特定には生体認証の技術(スワイプ式指紋認証システム)を応用したシステムによって、住所や氏名などの個人情報を取得することなくコホート集団を構築することとした。認証された指紋情報は、ソフトウェア (OmniPass) を活用し、暗号化した上で ID を発行する。対象者に口頭で説明し同意を得た上で指紋情報を登録してもらい、内蔵されたソフトウェアによって暗号化し、指紋情報

と一致させた個別の ID を番号シールとして発行する。情報の保守性を考慮し、本研究で活用する機器端末は、インターネット接続されない仕組みとした。

2) コミュニティセンターにおける血液検査会の実施

個別の ID 発行後、対象者は大阪市保健所がコミュニティセンター dista で実施する無料匿名の HIV 抗体および梅毒抗原・抗体検査を受検した。受検時に研修を受けた NGO スタッフが研究目的と概要を口頭で説明し、同意を得た。なお研究参加への同意が得られない場合でも希望があれば受検できることとした。

血液検査は HIV 抗体抗原検査と梅毒抗体検査とし、HIV 抗体検査は採血後、大阪市保健衛生検査所でスクリーニング検査され、大阪市立環境科学研究所で確認検査を実施したのち、1 週間後に結果を通知した。梅毒抗体検査も大阪市保健衛生検査所で実施し、1 週間後に結果を通知した。結果通知は個別に対面相談できる体制を近隣の会議室で整備し、大阪市保健所が既存のマニュアルに準じ実施した。受検時に番号シールを血液検査結果と質問紙調査表紙に貼り付け、血液検査結果は ID と連携させたうえで、倫理的配慮から大阪市保健所から分析担当者のみを開示される仕組みとした。

検査会は毎年約 200 人の利用を目標としたが、コミュニティセンターの許容を考慮し、今年度は検査会を 4 回実施した。

3) 連続横断的な無記名自記式質問紙調査の実施

対象集団の属性とゲイコミュニティの中心にあるコミュニティセンター dista で実施する血液検査会のインパクトを把握するために、血液検査会の前後に約 1 ヶ月間 (6 月・12 月) コミュニティセンター dista 利用者を対象に質問紙調査を実施した。

4) 分析方法

次年度以降、1年間の追跡でHIV感染症または梅毒が陽転化した人数を分子、フォローアップできた人数を母数とし新規判明率を推計する。最終的には人年法を活用し梅毒およびHIV感染症の罹患率を推計する。初年度はコミュニティセンター利用者質問紙調査で対象集団を把握し、因子分析を用いて尺度を開発した。また血液検査会利用者の属性について比較検討した。

(倫理面への配慮)

本研究の実施については名古屋市立大学看護学部倫理委員会の承認を得た。(ID番号15014-2 2015年6月23日)

C. 研究結果

1) コミュニティセンターにおける血液検査会の実施

初年度はコホートの仕組みを構築し、血液検査会を大阪市保健所と共同し、曜日を変えて4回(8月・9月・10月・2016年1月)実施した。結果は次項の表に示す。

4回の検査会の累計は、受検者数127人、指紋登録者割合78.6%、結果受取割合96.1%、HIV陽性判明者数7人(5.5%)、梅毒陽性・要治療判明者数6人(4.7%)であった。結果受取は設定した翌週に取りに来られない場合には大阪市保健所等で別日に対応した。血液検査会利用者(n=125、回収率98.4%)の属性はゲイ76.0%、バイセクシュアル18.4%、居住地は大阪府71.2%、兵庫県16.8%、京都府3.2%、平均年齢は34.1±10.4歳(最少齢17歳、最高齢66歳)、dista初来場者は42.4%、過去6ヵ月間のゲイ向け商業施設利用割合は83.2%であった。生涯におけるHIV抗体検査未受検者の割合は27.2%であった。

2) 連続横断的な無記名自記式質問紙調査の結果

検査会における対象集団の属性を把握するために質問紙調査を2回実施した。1回目を2015年6月に実施し、総利用者564人のうち再利用を除く197人に配布し160人の有効回答を得た(有効回収率81.2%)。利用者の属性はゲイ85.0%、バイセクシュアル8.1%、居住地では大阪府66.9%、兵庫県12.5%、京都府8.1%、平均年齢は30.0±8.3歳(最少齢16歳、最高齢70歳)、dista初来場者は18.1%、過去6ヵ月間のゲイ向け商業施設利用割合は78.1%であった。生涯におけるHIV抗体検査未受検者割合は26.9%、HIV感染既往5.6%、梅毒既往5.0%であった。

2回目を2015年12月に実施し、総利用者537人のうち再利用を除く214人に配布し177人の有効回答を得た(有効回収率82.7%)。利用者の属性はゲイ80.2%、バイセクシュアル6.2%、居住地では大阪府59.9%、兵庫県17.5%、京都府10.7%、平均年齢は33.9±9.6歳(最少齢18歳、最高齢71歳)、dista初来場者は11.3%、過去6ヵ月間のゲイ向け商業施設利用割合は69.5%であった。生涯におけるHIV抗体検査未受検者割合は26.6%、HIV感染既往9.6%、梅毒既往11.9%であった。

また検査と性感染症に関する15項目について因子分析を行い、4因子(検査の先延ばし傾向、性感染症スティグマ、検査の必要性、検査の利用しにくさ)を抽出した。一元配置分散分析の結果、今後の受検意図と性感染症スティグマと有意差がみられ、1年間に1回くらい群が最も低く3-6ヶ月間に1回くらい群が最も高かった。また検査の必要性とも有意差がみられ3-6ヶ月間に1回くらい群が最も高かった。生涯の受検経験と先延ばし傾向と有意差がみられ未受検群が最も高かった。また検査の必要性とも有意差がみられ未受検群が最も低かった。感染後のカミングアウトに対する態度と性感染症スティグマと有意差がみられ、話す必要が

ある群が最も性感染症スティグマが高く、次いで相手から話してほしい群であった。最も低いのは自分から話したい群であった。

D. 考察

コミュニティセンターdista 利用者と検査会利用者の属性は類似しており、ゲイ向け商業施設利用者割合は高かった。特に10月の検査会におけるゲイ向け商業施設利用割合は95.7%で、HIV感染や梅毒の陽性判明者割合も高かったことから、本検査会は検査ニーズの高いハイリスク層が対象となったと考えられる。しかし受検者数は当初の目標より少なく広報方法を工夫する必要がある。1月の指紋登録者割合が低い背景にはマイナンバー制の導入で個人情報保護への意識が高くなったことが考えられ、依頼時に不安を払拭できるよう、より詳細に説明する必要がある。

またコミュニティセンター利用者調査の回答者(n=160)における一元配置分散分析の結果、性感染症スティグマは、今後の受検意図や感染後のカミングアウトに対する態度と関連していた。性感染症スティグマは感染後のカミングアウトについて話す必要がある群で高く、3-6ヶ月間毎の定期受検を意図する群でも高かった。この背景にある規範構造を検討していく必要があるが、今後予防介入を進める上では性感染症スティグマを増加させないような工夫が必要となる。本研究で得られた検査と性感染症に関する尺度は、コミュニティセンターでの検査会自体の評価や、検査プログラム開発を進める上で有用であり、今後さらに分析を進めていく。

E. 結論

初年度はコホート体制を構築し、検査会を4回実施した。先行研究と比べ、HIV陽性判明割合は極めて高かった。次年度のフォローアップ

体制も確立しており、予防介入の評価尺度を確立し、検証できる体制を構築したと考える。

初年度の目的であった血液検査と連動させたゲイコミュニティコホート体制の構築とコミュニティセンターdistaにおける検査会の体制の構築は達成した。計画では300人のコホート登録を目指したが、初年度の登録者は92人であった。広報方法を工夫する必要があるが、継続的な実施で、コミュニティに検査会が浸透し利用者は増加すると考えられる。次年度以降、検査会を拡大しデータを蓄積することで意義のある研究成果が得られると考える。

MSMを対象とした血液検査と連動させた前向きコホートの構築は国内初であり、これまでの横断調査による活動評価に比べ、介入による発生率や予防行動の変化をより正確に評価できる可能性があり学術的意義がある。また、コミュニティセンターでの性感染症検査会は、MSM集団の生活の一部として検査を身近なものにし、検査行動の習慣化に寄与すると考えられ、同様の感染動向であるアジア各都市でも応用可能であり、国際的・社会的な意義もある。

本研究では住所や氏名などの個人情報を得ることなくMSMコホートを構築することを目指しており、方法や課題等を整理し他地域でのコホート研究に展開したい。HIV感染症のみではなく、結核などの地域保健行政の感染症対策にも活用できる。国内では保健所における検査体制が整備されているが、コミュニティセンターでの検査会実施から得られる知見は、他集団でも応用可能であり、個別施策層を対象とした新たな取り組みとなることを期待したい。

F. 健康危険情報

なし。

G. 研究発表

研究代表者

塩野徳史

欧文

- 1) Sherriff, N. Koerner, J. Kaneko, N. Shiono, S. Takaku, M. Boseley, R. Ichikawa, S. Everywhere in Japan: an international approach to working with commercial gay businesses in HIV prevention. Health Promotion International, doi: 10.1093/heapro/dav0969. 1-13, 2015.
- 2) Koerner, J. Shiono, S. Ichikawa, S. Kaneko, N. Tsuji, H. Machi, T. Goto, D. Onitsuka, O. Factors associated with unprotected anal intercourse and age among men who have sex with men who are gay bar customers in Osaka, Japan. Sexual Health. 9(4):328-333. 2012.

和文

- 1) 塩野徳史. 保健所における HIV 抗体検査受検者の特性と感染判明後の受診行動に関する研究 (博士学位論文). 名古屋市立大学看護学部. 2014.
- 2) 塩野徳史、金子典代、市川誠一、山本政弘、健山正男、内海眞、木村哲、生島嗣、鬼塚哲郎. MSM (Men who have sex with men) における HIV 抗体検査受検行動と受検意図の促進要因に関する研究. 日本公衆衛生雑誌. Vol. 60(10): 639-650, 2013.
- 3) 金子典代、塩野徳史、コーナ・ジェーン、新ヶ江章友、市川誠一. 日本人成人男性における生涯での HIV 検査受検経験と関連要因. 日本エイズ学会誌. 14: 99-105, 2012.

口頭発表

国内

- 1) 佐々木由理、市川誠一、塩野徳史、金子典代、萬田和志. 全国 8 都府県の保健所等と郵送 HIV 抗体検査受検者の特性について. 第 29 回日本エイズ学会学術集会・総会、2015、東京.
- 2) 細井舞子、安井典子、青木理恵、安保貴行、松村直樹、奥町彰礼、廣川秀徹、半羽宏之、松本健二、後藤大輔、町登志雄、宮田りりい、塩野徳史. ゲイ・バイセクシュアル男性における HIV 検査受検経験及び関連する要因. 第 29 回日本エイズ学会学術集会・総会、2015、東京.
- 3) 後藤大輔、町登志雄、宮田りりい、伴仲昭彦、鬼塚哲郎、塩野徳史、安井典子、細井舞子. コミュニティセンター dista における HIV 抗体検査の意義. 第 29 回日本エイズ学会学術集会・総会、2015、東京.
- 4) 町登志雄、後藤大輔、宮田りりい、伴仲昭彦、鬼塚哲郎、塩野徳史、安井典子、細井舞子. コミュニティセンター dista 来場者の特性. 第 29 回日本エイズ学会学術集会・総会、2015、東京.
- 5) 伴仲昭彦、鬼塚哲郎、大畑泰次郎、塩野徳史、町登志雄、後藤大輔. コミュニティセンター dista における中高年層 MSM 来場者誘致プログラム「南界堂茶会」の効果評価. 第 29 回日本エイズ学会学術集会・総会、2015、東京.
- 6) 塩野徳史、金子典代、市川誠一、伴仲昭彦、鬼塚哲郎、町登志雄、後藤大輔、宮田りりい. 近畿地域在住の MSM (Men who have sex with men) における初性交時の予防行動に関連した要因-10 年間の変化-. 第 29 回日本エイズ学会学術集会・総会、2015、東京.
- 7) 川畑拓也、森治代、小島洋子、駒野淳、古林敬一、岩佐厚、田端運久、亀岡博、中村幸生、杉本賢二、近藤雅彦、高田昌

彦、菅野展史、塩野徳史、柴田敏之. MSM
向け HIV 即日抗体検査における急性感
染期の抗体陰性例の検出. 第 29 回日本
エイズ学会学術集会・総会、2015、東京.

H. 知的所有権の出願・取得状 況（予定を含む）

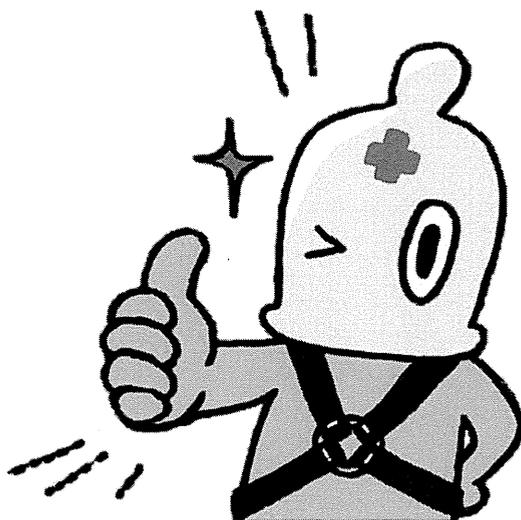
1. 特許取得状況
なし。
2. 実用新案登録
なし。
3. その他
なし。

厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策政策研究事業

H27-エイズ-若手-001

ゲイコミュニティにおけるコホートの構築と
HIV および梅毒罹患率の
推計に関する研究

Ⅱ 研究報告



1. コミュニティセンター利用者調査の結果

研究代表者：塩野徳史（名古屋市立大学看護学部/MASH 大阪）

研究協力者：後藤大輔、町登志雄、宮田りりい（公益財団法人エイズ予防財団/MASH 大阪）

大畑泰次郎、伴仲昭彦（MASH 大阪）

鬼塚哲郎（京都産業大学文化学部/MASH 大阪）

研究要旨

目的と方法：

コミュニティセンターdista で血液検査と連動させた HIV 抗体検査会を実施するにあたり、その対象となる集団の属性を把握することを目的として、検査会の前後約 1 ヶ月間、連続横断的な無記名自記式質問紙調査を実施した。また本検査会がゲイコミュニティに与えるインパクトを把握するために、検査と性感染症に関する規範のベースラインデータを得ることも目的とした。

結果：

1 回目（有効回収率 81.2%）の利用者属性はゲイ 85.0%、大阪府在住 66.9%、平均年齢 30.0±8.3 歳（最少数 16 歳、最多数 70 歳）、dista 初来場者 18.1%、過去 6 カ月間のゲイ向け商業施設利用割合は 78.1%であった。HIV 抗体検査未受検者割合は 26.9%、HIV 感染既往 5.6%、梅毒既往 5.0%であった。

2 回目（有効回収率 82.7%）の利用者属性はゲイ 80.2%、大阪府在住 59.9%、平均年齢 33.9±9.6 歳（最少数 18 歳、最多数 71 歳）、dista 初来場者 11.3%、過去 6 カ月間のゲイ向け商業施設利用割合は 69.5%であった。HIV 抗体検査未受検者割合は 26.6%、HIV 感染既往 9.6%、梅毒既往 11.9%であった。

また検査と性感染症に関する 15 項目について因子分析を行い、4 因子（検査の先延ばし傾向 $\alpha=0.71$ 、性感染症スティグマ $\alpha=0.74$ 、検査の必要性 $\alpha=0.43$ 、検査の利用しにくさ $\alpha=0.41$ ）を抽出した。一元配置分散分析の結果、今後の受検意図と性感染症スティグマ、検査の必要性に有意差がみられた。生涯の受検経験と先延ばし傾向、検査の必要性にも有意差がみられた。感染後のカミングアウトに対する態度と性感染症スティグマにも有意差がみられ、話す必要がある群が最も性感染症スティグマが高く、次いで相手から話してほしい群であった。最も低いのは自分から話したい群であった。

考察：

コミュニティセンター利用者の属性を明らかにし、検査会の対象層を把握した。また検査と性感染症に関する規範について尺度を開発した。

A. 研究目的

大阪地域の MSM における感染動向は厚生労働省エイズ動向委員会の報告によれば、大阪を含む近畿地域の 2014 年新規 HIV 感染者数は、男性同性間性的接触によるものが 147 人で 2013 年 (161 人) に比べやや減少傾向を示している。しかし新規 AIDS 患者数は 49 人であり、2013 年 (49 人) と同数である。先行研究で報告されている近畿地域の MSM 割合を用いた罹患率では、HIV 罹患率が 43.1 (2012 年)、58.3 (2013 年)、53.3 (2014 年) であり、AIDS 罹患率は 15.6 (2012 年)、17.8 (2013 年)、17.8 (2014 年) であり減少したとは言えない。

MSM 出生年代別にみた先行研究では AIDS 罹患率の推移は 1950 年代生まれ以外のいずれの年代でも増加傾向であった。近年では 1970 年代生まれや 1980 年代生まれでは感染拡大傾向は抑制されつつあるものの、出生年代層が若い群の方がより高く相対的に MSM 集団における感染拡大が示唆されている。

特にゲイ向け商業施設利用者はリスクの高い集団であると考えられ、過去 6 ヶ月間のコンドーム使用状況や性感染症の既往が非利用群に比べ利用群で高く、リスク状況が依然持続している可能性があることも示されている。これを背景にゲイ向け商業施設の中心にコミュニティセンター dista は設置されているが、dista 利用者の属性を把握した研究は少ない。本研究でコミュニティセンター dista での HIV 抗体検査会を実施するにあたっては、その対象となる集団の属性を把握する必要がある。またコミュニティセンターでの検査会が、MSM コミュニティに与えるインパクトを把握するためにはベースラインが必要である。そのため、連続横断的な無記名自記式質問紙調査を実施した。本報告では dista 利用者の属性および、彼らの検査に対する規範を明らかにすることを目的とした。

B. 研究方法

1) 調査方法

対象集団の属性とゲイコミュニティの中心にあるコミュニティセンター dista で実施する血液検査会のインパクトを把握するために、血液検査会の前後に約 1 ヶ月間 (6 月・12 月) コミュニティセンター dista 利用者を対象に質問紙調査を実施した。本研究の趣旨を事前に研修を受けた NGO スタッフが書面をもとに口頭で説明し、協力同意の得られた人を対象に回答を依頼した。回答後には、回答者自身がシールで封緘を行い、回答内容をスタッフがみることなく設置された回収箱に投函する仕組みとした。回答協力者には QUO カード 500 円相当を協力謝礼として提供した。

質問項目は、先行研究をもとに作成し基本属性 (性別、居住地、居住携帯、職業、セクシュアリティ)、過去 6 ヶ月間の利用施設など、検査行動、一番最近の性行動、性感染症既往歴、dista の利用経験、HIV 抗体検査や性感染症に対する規範など 20 問とした。質問項目の作成にあたっては、当事者参加型の MASH 大阪オープンミーティングで検討の機会をもち、修正を行った。HIV 抗体検査や性感染症に関する規範については、先行研究で検査行動と関連が報告されている項目を抜粋し、20 項目を作成した。

1 回目の調査は平成 27 年 6 月 1 日から 6 月 30 日までの休館日を除く 25 日間、2 回目の調査は平成 27 年 12 月 1 日から 12 月 31 日までの休館日を除く 26 日間配布した。

2) 分析方法

得られた回答のうち、重複する回答を除き、基本属性や規範など主要な項目に無回答であった回答を除き有効回答とした。

コミュニティセンター dista 利用者を把握する目的で 6 月と 12 月の回答集団を比較し、集団の経時的な特性の差異を明らかにした。

次に年齢を24歳以下、25歳-34歳、35歳以上の3区分の年齢層に分類し、6月、12月の有効回答者について年齢層別に分析した。

質問項目は、年齢層、性別、居住形態、職業、セクシュアリティなどの基本属性と、過去6ヵ月間の商業施設などの利用状況、性感染症既往歴、性行動、検査行動、コミュニティセンターdistaの利用状況、検査と性感染症に関する規範である。

検査と性感染症に関する規範には、先行研究から明らかになっている生涯の未受検の理由から「大阪にはHIV検査をうける機会、たとえば時間や場所などが少ないと思う」「大阪にはゲイ・バイセクシュアル男性が利用しやすい検査場所があると思う」「HIV検査を受けるとゲイ・バイセクシュアルであることが知られると思う」「HIV検査を受けるときに、男性とのセックスについて説明するのは面倒に感じる」「HIV検査をして結果を知るとはいつも怖いので、できれば受けたくないと感じる」「HIV検査を受けることで、周りの人にはHIVに感染していると思われるように感じる」「HIVに感染しているかどうかは、ぎりぎりまであいまいなままにしておきたい」の7項目、先行研究から受検理由として多かった「HIV検査は予防に自信のないセックスをしたときに受けるべきだと思う」「新しい彼氏や恋人ができれば(できそうなときは)、HIV検査を受けるべきだと思う」の2項目、海外の先行研究や健康行動の理論をもとに、「HIV検査を定期的に受けることは良いことだと、周りの友達に思っている」「健康を維持するためにHIV検査は受けたほうがよいと思う」の検査に対する規範2項目、「性感染症に感染すれば、自分自身を振り返って悪いことしたなと感じる」「性感染症に感染すれば、セックスする相手は見つけにくくなると思う」「性感染症に感染すれば、友達と今までのようにはつきあえなくなると思う」「性感染症に感染したことが周りの友達に知られたら、嫌な印象を持たれると思う」「性感染症の検査を受け

ることで、多くの人と「ナマ」でやりまくっていると、周りの友達から思われる」の性感染症に関するスティグマ5項目、「HIV感染症は治療の進歩によって昔ほど重大な病気ではなくなった」「エイズ発症をきっかけにHIVに感染していることがわかるより、検査で早めに感染していることがわかったほうが良いと思う」「HIV感染症に感染したら、セックスする前にそのことを伝えたいと思う」「HIVを持っている人はセックスする前に、そのことを相手に話すべきだと思う」のHIV感染症に関する知識・態度の4項目とした。これらの質問項目はコミュニティセンターdistaを利用するHIV陽性当事者やMASH大阪のオープンミーティングで検討して作成した。

検査と性感染症に関する規範20項目に関して因子分析を用いて尺度を作成した。その後一元配置分散分析を用いて、生涯におけるHIV抗体検査受検経験や今後のHIV抗体検査受検意図との関連を検討した。生涯におけるHIV抗体検査受検経験は未受検、1回・2回、3回以上の3群、今後のHIV抗体検査受検意図は定期的に受けない、1年間に1回くらい、3ヵ月～6ヵ月間に1回くらいの3群に分類した。

また「HIV感染症に感染したら、セックスする前にそのことを伝えたいと思う」「HIVを持っている人はセックスする前に、そのことを相手に話すべきだと思う」の2項目から感染後のカミングアウトに対する態度として話す必要がある、自分から話したい、相手から話してほしい、話す必要はあまりない、の4群に分類し、作成した尺度との関連をみた。

データの集計および統計処理にはIBM SPSS Statistics 23を用いた。統計的有意水準は5%未満とした。

なお、本調査は名古屋市立大学看護学部研究倫理委員会より実施の承認を得ている。(ID番号15014-2 2015年6月23日)

C. 研究結果

利用者の特性を明らかにするために、コミュニティセンターdistaで質問紙調査を実施した。概要を付表1に示した。1回目の調査は総利用者564人のうち再利用を除く197人に配布し160人の有効回答を得た(有効回収率81.2%)。2回目の調査は総利用者537人のうち再利用を除く214人に配布し177人の有効回答を得た(有効回収率82.7%)。

付表1 調査概要

	総来場者数	Distaで実施されたイベント数	有効回答者数(有効回答率)	初来場者割合
1回目 6月1日～6月30日	564人	イベント:2 講座:9 展覧会:0	160人 (81.2%)	18.1%
2回目 12月1日～12月31日	537人	イベント:4 講座:10 展覧会:2	177人 (82.7%)	11.3%
計	1,101人	イベント:6 講座:19 展覧会:2	337人 (82.0%)	14.5%

1) コミュニティセンターdista利用者の把握
1回目(6月)と2回目(12月)の回答集団について比較した結果を表1-1から表1-4に示した。

性別は男性割合が多く1回目95.0%、2回目88.7%であった。「その他」の中ではトランスジェンダーと回答した人が大半を占めており1回目4.4%、2回目4.0%であった。性的指向では「ゲイ」と回答する人が最も多く1回目85.0%、2回目80.2%であり、次いで「バイセクシュアル」が1回目8.1%、2回目6.2%であった。「わからない・決めたくない」と回答する人もあり、あわせると1回目3.2%、2回目4.5%であった。居住地は大阪府が最も多く(1回目66.9%、2回目59.9%、以下同順)、次いで兵庫県(12.5%、17.5%)、京都府(8.1%、10.7%)、奈良県(3.7%、6.2%)の順であった。性別・性的指向・居住地について有意差はみられなかった。

平均年齢は1回目30.0±8.3歳(最少年齢16歳、最高年齢70歳)であり、2回目は33.9±9.6歳(最少年齢18歳、最高年齢71歳)であった。

年齢層割合は有意差がみられ($p<0.01$)、1回目は2回目に比べて、20-29歳層で高く(50.0%、33.3%)、40-49歳層では低かった(8.1%、22.0%)。

過去6ヵ月間の利用施設については「ゲイ向けの合コン」と「ゲイ向けアプリ」を除けばほぼ同じ割合であり、ゲイ向け商業施設としてはゲイバー利用が全体で60.2%(61.3%、59.3%)、ゲイナイト利用が全体で28.8%(31.9%、26.0%)、ゲイショップ利用が全体で30.3%(33.1%、27.7%)、有料のハッテン場利用が全体で32.0%(35.6%、28.8%)であった。4つの施設のうちのいずれか利用した割合は全体で73.6%(78.1%、69.5%)であった。

図1 過去6ヵ月間の利用施設など

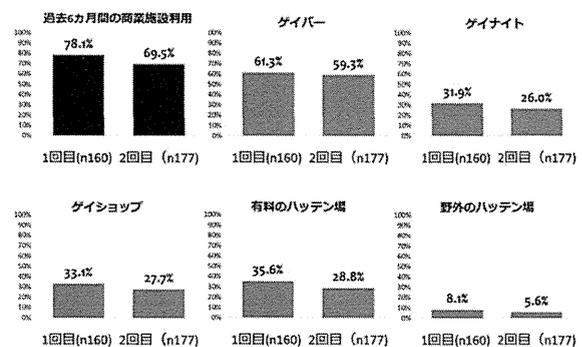
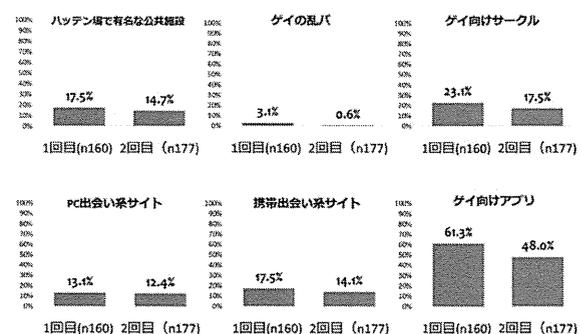


図2 過去6ヵ月間の利用施設など



コミュニティセンターdistaを初めて利用した割合は1回目18.1%、2回目11.3%であり有意差はみられなかった($p=0.06$)。これまでにdistaで性感染症やエイズの情報を得たことがあるのは全体で75.1%(71.2%、78.5%)であり、スタッフから聞いたと回答する人が多かった(43.8%、48.6%)。初来場者を除くと、スタッ

フから性感染症やエイズの情報を得た人の割合は1回目 53.4%、2回目 54.8%であった。

これまでに dista で悩みや不安について相談したことがあるのは全体で 42.7% (41.2%、44.1%) であり、スタッフに相談したと回答する人が多かった (31.3%、27.1%)。初来場者を除くと、スタッフに相談した人の割合は1回目 38.2%、2回目 30.6%であった。コミュニティセンターdistaを利用する中で、友達に相談した割合がスタッフに次いで高く1回目 15.6%、2回目 18.6%であった。また他の利用者に相談した割合は1回目 10.0%、2回目 10.2%であった。

図3 これまでにdistaで性感染症やエイズの情報を得たことはありますか?(複数回答)

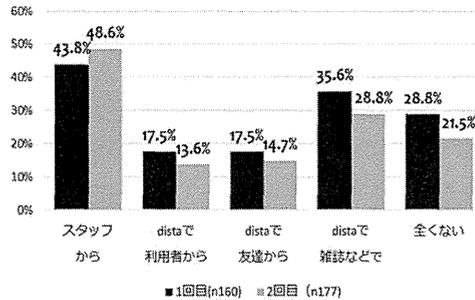
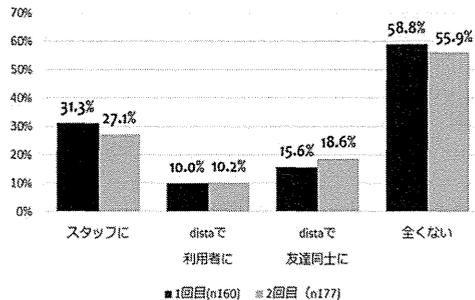


図4 これまでにdistaで悩みや不安について相談したことはありますか? (複数回答)



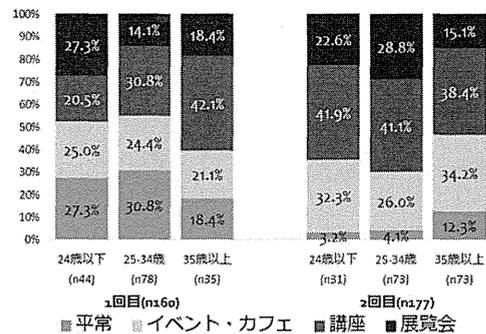
2) 年齢層別分析

年齢層別に分析した結果を表 2-1 から表 2-7 (1 回目)、表 3-1 から表 3-7 (2 回目) に示した。コミュニティセンターdista では年齢層によって嗜好が異なることを考慮し、利用者と協力しながら、カフェイベントや映画イベント、手話や中国語などの講座が開催されており、コミュニティで人気のあるイラストレーターや

キーパーソンの写真展などの展覧会も実施している。利用者におけるイベントカテゴリ割合をみると1回目と2回目で異なっており ($p < 0.01$)、1回目(6月)に比べて2回目(12月)では、イベント・カフェ割合が高く(23.8%、30.5%)、講座割合も高かった(30.6%、40.1%)。

年齢層別には有意差はみられなかったが、1回目の回答者では35歳以上では講座割合が最も高く42.1%であった。2回目の回答者ではいずれの年齢層でも講座割合が高く38.4%(35歳以上)から41.9%(24歳以下)であった。

図5 年齢層別イベント区分



居住形態について1回目・2回目ともに、24歳以下は親や兄弟姉妹との同居割合が高く(56.8%、51.6%)であり、25-34歳は一人暮らし割合(42.3%、43.8%)、35歳以上も一人暮らし割合(50.0%、43.8%)が高かった。

職業について1回目・2回目ともに、24歳以下は学生割合が高く(43.2%、48.4%)であり、25-34歳は常勤割合(53.8%、53.4%)、35歳以上も常勤割合(42.1%、45.2%)が高かった。

図6 年齢層別 HIV抗体検査受検経験

